

学会主催の思い出

第19回 会長 故 赤 倉 一 郎

第19回日本胸部外科学会は昭和41年（1966年）10月18日（火）19日（水）に東京都の国立教育会館と虎の門久保講堂において開催されました。当時、会長として学会運営に意図したことなどを、今思い出すままに述べさせていただきます。

日本胸部外科学会の発足当時は肺外科、殊に肺結核外科が主流を占め、心臓外科が僅かにこれに次ぐ状態でしたが、その後年と共に胸部外科領域は拡大発展し、近年は胸部外科全般にわたりバランスのとれた学会が運営されるようになって来ました。しかし、従来の学会で十分に論議されているにも拘らず、なお宿題的に問題点が残されているものも少なくありません。そこで、それらの問題を重点的に採り上げて問題点の解明に努めたいと思いました。

この考え方を根幹として学会プログラムの編成に当り、一般演題は勿論、シンポジウム、シネシンポジウム、供覧映画にいたるまで、広く会員に公募しました。その結果、一般演題は 183題を数え、4会場で活発に発表と討論が行われました。

学会プログラムのメインイベントとしては、シンポジウム4題「肺結核外科の適応と限界」、 「肺癌治療の困難性」、 「特発性食道拡張症」、 「フアロー氏四徴症根治手術」と、シネシンポジウム2題「食道再建術」、 「人工弁置換手術」、 および外国人学者の招待講演として、 Mayo Clinic の F.H. Ellis に「The Results of Operation for Acquired Mitral Valve Disease」を依頼し、最後に会長演説として「食道癌治療の歩みと共に」を用意しました。

シネシンポジウムは私が企画したもので、従来のシンポジウムとシネクリニックを合体する形式と方法により手術手技の問題について相互に理解を深め易い発表と討論を行うことを主眼としたところから、シネシンポジウムと名付けて本会で初めて試みました。

参加していただいた諸先生の絶大な御協力により、幸いにこの試みは予期以上の成果を上げ、その後本学会のみならず他の学会においてもシネシンポジウムが活用され、今日も存続していることは嬉しい思い出の一つです。

外国人学者の招待講演については、それなりに負担を要するものですから、講演内容のみならず学会参加の意義をできるだけ広く有意義にしたいという考えをもって人選しました。結果として F.H. Ellis 教授を選びましたが、同氏は研究歴として肺外科、縦隔食道外科、心臓外科と進んで来た胸部外科医であるので、単に特別講演をお願いしただけでなく、シネシンポジウム「特発性食道拡張症」と「人工弁置換手術」および供覧映画にも快よく参加していただきました。

この事により私共はこれら分野における米国のレベルを理解し、また Dr. Ellis はわが国の胸部外科の現況をよく理解し、これを米国はじめ世界へ伝えてくれるよう期待しました。

本学会の特徴の一つとして思い出されることは、食道外科の問題を例年になく多く大きく採り上げたことであります。

わが国の食道外科、ことに食道癌の外科は瀬尾貞信教授（千大）、大沢達雄助教授（京大）らにより既に1932年に報告があるが、戦時中その進展は中絶し、戦後、中山恒明教授（千大）、桂重次教授（東北大）らにより再び活発になりました。しかし、なお全国的には普及しているとはいえない現

状でした。そこで、本会々員が戦後に肺外科、心臓血管外科の領域で目覚ましい躍進を遂げたように、食道外科の領域においても今やその秋が来ていると考え、今回食道外科に異例のウエイトをかけたわけですが、今想えば「あれで良かった」と楽しい思い出の一つになりました。

(前国立栃木病院長、慶大教授)

付追 赤倉先生はこの原稿をおかきになられたのち昭和52年6月28日に逝去された。
